

朗読劇

トラ、サクラ、ジムノペディ

林音子

水嶋馨

菅原静子

遠藤

山下

岩本大尉

女生徒1

女生徒2

※いくつかの劇中曲は、ピアニストによる生演奏を推奨する

*

幕開き。(ME:ガブリエル・フォーレ『シリエンヌ』)

林音子、汽車に揺られながら車窓を眺めて独白。

音子

線路は五線譜に似ている。枕木は拍を刻み、錆びたレールの上を、黒い機関車が音符となって走っていく。夢も、希望も、憂鬱も、ぜんぶを乗せて運んでいく。風がそつとハーモニーを添えて景色は流れるように移り変わる。そして、一度汽車が走り出したらもう、後には引き返せない。

音子、通知書を取り出す。

音子

昭和二〇年、わたしのところに音楽特待生としての任用通知が届いたとき、楽団でチェロを弾いている父は「おまえを誇りに思う」と言ってくれた。わたしにピアノを教えてくれた母は微笑みながら、その瞳は少しでも潤んでいたと思う。そんな両親に見送られたわたしは、惜別の情は駅のホームにすっかり置き去りにして、これからの生活に胸を躍らせていた。長野県の山奥にある白霧音楽学校（しろきりおんがっこう）。わたしのプレリユードはそこから始まる。

ガタンと汽車が揺れる。

乗客の水嶋馨、よろけて倒れそうになる。

馨

おととととととと……。

馨、倒れる拍子に音子の隣に着座。

音子

大丈夫ですか？

す、すみません。

馨、咳き込む。

馨

ごほっごほっ。

音子

ほんとに大丈夫？

だ、大丈夫、ほんとに、だいじよ、ごほっごほっごほっごほっ！

音子

いや、とてもそうは見えないんですけど！

馨

自分、肺が悪くって。汽車の煙にやられたみたい。けどすぐに治まるので、ここで少し休ませてもらってもいいですか？

音子

ええ、どうぞ。

馨

(音子の通知書に気づいて) あれ、それって。

音子

え？

馨

もしかして、通知書？ 白霧音楽学校の。

音子

はい。でも、どうして。

馨、音子と同じ通知書を取り出す。

馨

これ。

音子

え、じゃああなたも？

馨

よかった、仲間がいた。

音子

楽器は？ わたし、ピアノ。

馨

ぼくもだよ。というか、今回呼ばれたのはピアノ科の生徒だけみたい。

音子

そうなんだ。でも珍しいのね、その……。

馨

うん、男はぼくだけだって。水嶋馨(みずしまかおる)。名前だけ聞くと、

音子

よく女の子と間違われる。

馨

わたし、おとこ。

音子

え。

馨、まじまじと音子を見る。

馨
音子
馨
音子
とてもそうは見えないけどなあ。
じゃなくって、音楽の「音」に子どもの「子」と書いて、音子。林音子（はやしおとこ）。
ああ、ごめん。
いいの、いいの。いつもそうやって聞き返されるんだ。「え、あんた男？」って。わたしたち、似たもの同士ね。

音子、外を見る。

音子
馨
音子
馨
音子
うわあ、おっかい山。
こっちは雪がまだ残ってるね。
ってことは、もうすぐ？
うん。
ああ、どんなところなんだろう。

汽車は汽笛を鳴らして進み、やがて停車する。
音子、トランクを持って駅のホームへ駆け降りる。

*

駅。
音楽教諭の菅原静子が叫ぶ。

菅原
白霧音楽学校特待生の皆さん、こちらです。さあ、集まって。

ガヤガヤと数十名の女子が集まってくる。

音子

これ全員ピアノ特待生？

馨

なんかすごいね。

菅原

(人数を確認して)……よろしい。では、二列になって速やかにわたしに着いてきなさい。ぐずぐずしている人は置いていきま
すよ。

音子と馨、並んで菅原に続く。

音子

やっぱり、寒いところだね。

菅原

私語は慎みなさい。

音子

はいっ。

音子、独白。

音子

雪で真っ白な山道を、重い荷物を持って何十分もかけて歩いた。山の中はあまりに静かで、まるで時が止まったみたい。振り返ると、四分音符のようなわたしたちの足跡がずっと向こうまで続いていた。

音子、再び前を向く。

音子

(校舎を見つけて) あっ……。

山下

うわあ、すごーい。

遠藤

立派な校舎。

女生徒1

お城みたーい。

女生徒2

ねえ見て、あの門。おっきいー。

菅原

立ち止まらないでさっさと中に進みなさい。まずは寮に荷物をおいて、それからすぐに音楽室に来るように。さあ。

菅原、生徒を急かすように両手を打ち鳴らす。

音子たち、急いで行動する。(演者の配置を変えてもよいかもしれない)

*

音楽室。

菅原、教壇に立つ。

菅原

皆さん、白霧音楽学校へようこそ。わたしはあなた方の指導を担当する菅原です。全員承知のことと思いますが、特待生として選ばれるのはこの上なく名誉なことです。ただし、それはあなた方がよく学び、優秀な演奏家として御国に貢献するのを義務付けられているということ。それを常に心に留めておくように。わかりましたね。

生徒たち

はい。

菅原

今日は初日ですので、まず最も基本的なことを教えます。敵性音楽、そして敵性語についてです。

音子

敵性音楽。

菅原

三年ほど前、情報局の指導により特定の音楽の演奏や放送が禁じられました。たとえば……。

音子

(客席に)たとえば、ジャズやブルース、それに英語の歌詞が入った歌の全般。つまりそれは、今の戦争で日本の敵となっている国の音楽だ。わたしは、それまで楽譜を見つめることで目を逸らしていた現実を、ここへ来ていきなり目の前に突き付けられたような気がした。

菅原

古典音楽も同様です。本校ではわたしが許可した楽曲以外の演奏は一切禁止とします。次に、敵性語についてですが……遠藤さ

遠藤
ん。
はいっ。

遠藤、思わず立ち上がる。

菅原
あなたはこの学校へ何を弾くためにやってきましたか？

遠藤
はい、ピアノです。

菅原
なるほど。では手を前に出しなさい。
遠藤
は、はい。

遠藤、両手を差し出す。

菅原
……ていつ！

菅原、物差しで遠藤の手を叩く。

遠藤
きゃんっ！ えーん、痛い……。

生徒たち、ざわつく。

菅原
よいですか。これからあなた方が弾く楽器はピアノではありません。「洋琴（ようきん）」です。
音子
あの四角くて甘い……。
馨
それは羊羹。

山下

しょうもないこと言うんじゃないわよ。

菅原

「西洋のお琴」と書いて洋琴。敵性語とは米英の言葉、簡単に言えばカタカナです。今はこの国からカタカナをナカッタことにするので。楽器の名前も例外ではありません。ピアノは「洋琴（ようきん）」バイオリンは「提琴（ていきん）」それではコントラバスは……山下さん。

山下

（起立して）はい。

菅原

（顔を近づけて）コントラバスは？

山下

げ、弦琴、とか？

菅原

さんねーん！

菅原、物差しで山下の頬を引っ叩く。

山下

ぎゃー！

菅原

正解は「妖怪的四弦（ようかいしげん）」です。

音子

なんじゃそりゃあ。

馨

妖怪って。

菅原

ちなみにサクソフォンのことは「金属製ひん曲がり尺八（きんぞくせいひんまがりしゃくはち）」と言います。

音子

そんな無茶苦茶な！

馨

もう何が何だか……。

菅原

そして最後に、敵性語を排除する以上、音階の呼び名も改めねばなりません。よって今後「ドレミファソラシ」は「いろはにほへと」とします。

音子

え……そんな、またまたー。

菅原

これは真面目な話です。そのように教えるよう文部省より正式に通達されています。初めのうちは少々不便でしょうが、愛国心さえあればすぐに慣れるはず。それでは、本日はここまで。明日からは、ひたすら洋琴の訓練に励んでもらいます。わたし

がビシッと指導しますから、覚悟しておくように！

騒然となる音楽室。(ME: モーツァルト『トルコ行進曲』)

音子、独白。

音子

翌日配られたトルコ行進曲の楽譜は、本当に「ドレミ」が「いろは」に書き換えられていた。菅原先生は、慣れないわたしたちの指にも容赦なく、一音でも間違えたら得意の物差しでビシッとやられる。そこには音楽的な情緒は何一つ存在せず、ただ正確なリズムとタイミングで鍵盤を叩くだけの、機械的な作業のようだった。

生徒たち、それぞれ鍵盤に向かい指を動かす。

その様子は演奏というよりタイピングに近い。

菅原はミスをした生徒を次々と物差しで叩いていく。

一連の動作は『トルコ行進曲』に合わせてリズムカルに行われる。

*

ある晩の女子寮。

山下

で、先生に訊いたの、ティンパニーはなんて言えばいいんですか、って。そしたら「半円鍋型ぎゅう縛り高低自在太鼓(はんえんががたぎゅうしばりこうていじざいだいこ)です」って真面目に答えるもんだから、わたし可笑しくって。

女生徒1

ケーキは焼き菓子、アイスクリームは氷菓(ひょうか)。ドーナツは砂糖天ぷら。

女生徒2

カレーライスなんて、辛味入汁掛飯(からみいりしるかけめし)だもんね。

音子

美味しくなさー。

山下 遠藤さん、何見てるの？

遠藤 え。ううん、なんでもない。

山下 わかった、恋人の写真でしょ！

遠藤 え。

山下 あ、赤くなった。かわいいー。

女生徒2 ねえねえ、どんな人？

女生徒1 見せて、見せて。

遠藤、恥ずかしそうに写真を見せる。

生徒たち

おおー。

遠藤 今は飛行隊の一〇一部隊にいるの。

山下 じゃあ、パイロット？

音子 カッコいいー。

遠藤 戦争に勝ったら……一緒になろうって。

生徒たち どっひゃーー。

山下 ちよつと、惚気ないでよ。

女生徒2 ちくしょーうらやましー。

女生徒1 ここにいたら出会えないもんね。

山下 水嶋くんは？

女生徒1 わたしは遠慮しとく。

女生徒2 彼、優しいけど体弱いしね。

山下 悔しいけど、今はピアノ、じゃなかった。洋琴に打ち込むしかないか。

女生徒2

歯を食いしばって寝よう。

女生徒1

おやすみー。

遠藤

音子ちゃん、どこ行くの？

音子

ちよっとお花を摘みに。

音子、部屋を出る。

*

音子、外の廊下を歩く。

と、微かにピアノの音が聞こえてくる。

音子

あれ？

音子、音色に誘われるように校舎へ向かう。

*

音楽室。

馨、ピアノを弾いている。(エリック・サティ『ジムノペディ 第一番』)

音子、部屋に入ってくる。

馨

(演奏を止めて) 見つかったね。

音子

今のは？

馨

サテイのジムノペディ。敵性音楽だから本当は禁止なんだけど。

音子

素敵な曲。

馨

サテイはね、この曲を「ゆっくり苦しみと悲しみを込めて弾け」って書いてるんだ。だけど、僕はこれを聴くと、なんだかとても穏やかな気持ちになる。音子ちゃんは、どんな曲が好き？

音子

わたしはシヨパン。

馨

じゃあ、どっちも禁じられた音楽だ。

音子

やっぱり似たもの同士だね、わたしたち。

馨

まずい。隠れて。

二人、咄嗟にピアノの陰に隠れる。

菅原、音楽室に入ってくる。

菅原

……。

菅原、部屋を見回す。

菅原

空耳かしら。

音子たち、少し顔を出して菅原の様子を窺う。

菅原、去る……と見せかけて振り返る。

音子
馨

！
！

音子たち、慌ててまた隠れる。

音子

は、は、はくちゅんっ。

馨

えー。

菅原

誰です、そこにいるのは！

音子

……にゃ、にゃー。

馨

いや、そんなのでごまかせるわけ……。

菅原

なんだ猫か。

馨

ごまかせたー。

菅原

早く出ていくのよ。ねこふんじゃったー、ねこふんじゃったー……。

菅原、歌を口ずさみながら去っていく。

音子

あつぶねー。

馨

間一髪だったね……ところで音子ちゃん、何しに外へ？

音子

あ！

音子、突然出ていこうとする。

馨
音子

どうしたの？
お花摘みに行くの、忘れてた！

音子、走り去る。

馨

ははは……ごほっ、ごほっごほっ。

馨、咳き込みながら音楽室を出る。

*

進級試験。

菅原
遠藤

皆さん、日々の訓練、ご苦労様です。本日は予告していた通り、進級をかけた試験を実施します。いよいよだね。

山下

わたし、自信ない。

菅原

始める前に、本日の試験監督をお務めになれる方をご紹介します。どうぞ。

岩本大尉、登場。

菅原
音子

え……軍人さん？
帝国陸軍の岩本大尉殿です。一同、礼。

生徒たち、頭を下げる。

菅原
岩本
（岩本に）それでは、始めさせていただきます。
うむ。

岩本、どっしりと椅子に座る。

菅原
名前を呼ばれた者から前に出てきて演奏しなさい。落ち着いて、最後まで正しい鍵を正しい拍で打ち続けるように！

（ME：フランツ・リスト『超絶技巧練習曲／第4番ニ短調「マゼツパ」』）
音子、独白。

音子
異様な緊張感の中、試験は淡々と進められた。課題曲はリストの超絶技巧練習曲マゼツパ。けれど、わたしは自分がどんな風に弾いたか、まったく覚えていない。どうして軍人さんが？そして翌日、試験の結果が掲示板に張り出されたときから、わたしの人生は一気に、転調した。

*

生徒たち、掲示板の前に集まり合否を確かめている。

音子
馨
やった……受かった。
よかったね、音子ちゃん。

音子

馨くんもおめでとう。

菅原、現れる。

菅原

合格者はわたしに着いてきなさい。ほかの者は寮に戻って待機。行きますよ。

音子、馨、遠藤、山下が菅原についていく。

菅原、いくつもの扉を鍵で開けて進む。

菅原

よいですか。このことは他言無用です。これから見聞きすることも、何一つ口外することは許されません。少しでも情報を漏らしたら……とにかく、秘密厳守です。

音子たち、顔を見合わせる。

菅原、重い扉を開く。

道は地下へとつながっている。

山下

何、ここ……。

地下に続いている。

馨
菅原

参りますよ。

菅原、地下へと降りていく。

音子

……行こう。

音子たち、進む。

*

地下。

薄暗い部屋で岩本が待っている。

音子たち、岩本の前に一列に並ぶ。

岩本

合格おめでとう。今回の試験において諸君の打鍵能力は極めて優秀と認められた。よって、本日をもって諸君を大日本帝国陸軍特別電信員に任命する。

音子

でんしんいん？
進級じゃなかったのか？

山下

困惑するのも無理はない。説明するでしょう。ただし、これは国家機密事項だ。菅原教官？

菅原

彼女らは喋りません。
よろしい。明かりを。

菅原、出ていく。

「ガシャン」と音を立てて部屋が明るくなる。

机と椅子が整然と並んでおり、四方を囲む壁には地図や数字の書かれた紙が所狭しと貼られている。

そして机の上にはタイプライターのような機械が並んでいる。

岩本

ここは陸軍直轄の地下電信室だ。戦地に向けて暗号電文を送信し、兵隊に命令を下す。また、あちらからの信号を受信、早急に

遠藤

岩本

暗号解読を行い、戦況などを上官殿らに報告する役割も担う。モールス信号は諸君らも聞いたことがあるだろう。あの、ツーツートントン、っていう？
これらは九七式暗号機（きゅうななしきあんごうき）というものだ。この鍵盤で電文を打ち込み、それを暗号化してモールス信号で戦地へ指令を送る。かしこくも、これは天皇陛下より賜りし御命令である。各位、心して任務に当たるべし。詳細は明日以降、しかと申し渡す。どれ、少し中を見て回るといいだろう。菅原教官。

菅原、姿を現す。

菅原

はい。

岩本

今後について話を。

菅原

わかりました。

岩本と菅原、去る。

馨、おそろおそろ指で暗号機の電鍵に触れてみる。

「ツーツーツ」と鳴る。

一同、顔を見合わせる。

続けていくつか音を鳴らしてみる。

音子、独白。

音子

戦争が長引くにつれ日本はどんどん人手が足りなくなつて、学生や女の人たちも様々な支援に動員されていた。武器や飛行機の部品を作る作業員、電話回線の接続を行う電話交換手、そして政府や軍の通信を担う電信員。特に地方の電信局には若い女性職員が多かつたという。わたしはこれまでの訓練を思い出した。「いろはにほへと」で正確な鍵を正確なリズムで打つ……優秀な演奏家になるためじゃない。戦地に信号を送る暗号通信機、わたしたちは初めからこれを弾くために任用、いや、召集されたん

だ。(山下たちに) ねえ、みんな……。

山下と遠藤、うつむいて震えている。

山下
や……や……。

音子
そう、だよ。やっぱり、ちょっと嫌だよ。

山下
やっぱり、やったー！

山下と遠藤、飛び上がる。

音子
えー！ なに？ 喜んでるの？

山下
当たり前じゃない。天皇陛下の御命令だって。あー、合格してよかったー。

遠藤
わたし、兵隊さんの御役に立ってるんだ。

山下
あ、遠藤さん今、恋人のこと考えてるでしょー。

え。

赤くなった。かわいいー。

音子
ちょっと……。

馨
音子ちゃん、一緒にがんばろう。

音子
馨くん。

山下
そうだよ、わたしたちの手でたくさんの人を助けることができるんだから。こうなったらもう腹括るしかないって。

遠藤
音子ちゃんなら大丈夫だよ。一番上手だもん。

音子
そ、そうかな……。

忍者1・2、現れる。

忍者1
しゅっ、にんにん。

忍者2
にんにん。

山下
あ、忍者だ。

忍者1
山。

忍者2
川。

忍者1
……よし、通れ。

忍者2
うむ、これにてドロソ。

忍者1・2、消える。

岩本
それだけではない。

恋人1・2、現れる。

恋人1
あははは。

恋人2
うふふふ。

山下
あ、恋人たちだ。

恋人1、夜空を見上げる。

恋人1
月が……綺麗ですね。

恋人2 死んでもいいわ！

恋人1 あははは。

恋人2 うふふふ。

恋人1・2、去る。

岩本 ぜんっぜん意味がわからない！ が、それでいい。他人に悟られぬところこそが肝要だ。表向きの言葉を裏返せばその真意が見え

てくる。覚えておくといい。

音子 なるほど……（暗号表を見て）あの、「サクラサクラ」っていうのはどういう意味ですか？

岩本 ああ、それか。それはな……「総員玉砕」だ。

音子 あ……。

岩本 しかし諸君らはさすがに飲み込みが早い。この調子ならば実戦投入までそう長くは掛からんだろう。

音子、独白。

音子 その言葉通り、わたしたちの出番はすぐにやってきた。

*

アメリカ軍の暗号解読班が日本の無線を傍受している。

米兵1 よお、兄弟。今日もジャップどもの通信を傍受してやつらの作戦をぶっ潰してやろうぜ、

米兵2 さっさと終わらせてキンキンに冷えたコークで乾杯だ。ん？ ちょっと待て。

米兵1 おいおい、どうした。ラジオから死んだばあちゃんの声でも聞こえてきたか？
米兵2 黙れ。いいからこいつを聞けって。

米兵1、ヘッドホンをつける。(ME: ジュゼッペ・ヴェルディ『レクイエム』ピアノ Ver.)

米兵1 ……嘘だろ。なんなんだ、この信号は。
米兵2 こんな複雑な暗号じゃ解読してる間に戦争が終わっちゃうぜ。

警報。

米兵3、飛び込んでくる。

米兵3 ニッポンの奇襲攻撃だ！ 暗号解読班はポーカーでもやってやがったのか、クソツタレ！
米兵1・2 オーマイガッ！

音子、独白。

音子 あるときはヴェルディ、あるときはバッハ、そしてまたあるときはベートーヴェンを奏でるかのように、わたしたちはその指先で米軍を翻弄した。

遠藤、山下、馨と続けて『レクイエム』を奏でていく。

音子 うおおお、なんか指がめっちゃ動くー。
岩本 いいぞ、その調子でどんどん打ち込め！

遠くから戦地の銃撃や爆撃の音が聞こえる。

音子

菅原先生に鍛えられたわたしの指は自分でも驚くほど軽やかで正確に電鍵を叩いた。最初は少し戸惑いもあったけど、目の前の暗号機をピアノと思い込むことで、わたしは命じられるままに演奏を続けた。

「・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー」

岩本

素晴らしいぞ、林。きみのおかげでまたしても作戦は成功だ！

一同、音子に拍手を送る。

岩本

さて、少し早いけど今日はもう帰ってよろしい。各自、明日に備えて体を休めるように。

音子たち

はい。

岩本、去る。

遠藤

ふう、おつかれさま。

馨

また明日。

遠藤と馨、去る。

音子も部屋を出ようとするが、山下が一人残っている。

音子

山下さん、帰らないの？

山下

ああ、うん。いやあ、わたしみんなより下手つぴだからさ。ほら、今日もまた打ち間違えて怒られちゃったし。だからもう少し勉強していいこうかと思って。先、帰っていいよ。

音子

わかった。あんまり無理しないでね。おやすみ。

山下

音子、去る。

山下、暗号表と電鍵を見比べている。

岩本、戻ってくる。

岩本

山下。

あ、はい。

きみに少し話がある。

え。

来たまえ。

山下、岩本に連れられ出ていく。

*

廊下。

菅原、背後から音子を呼び止める。

菅原 林さん。

音子 先生、じゃなかった、教官。

菅原 先生で構いません。どうですか、電信員は。

音子 がんばってます。ただ……。

菅原 なんです。

音子 いいえ、なんでも。

菅原 言いなさい。

音子 言ったら怒られます。

菅原 それはこちらで決めます。

音子 だって……。

菅原 物差しを持ってきましようか？

音子 わー、言います、言います。その、なんだかちょっと複雑な気持ちで……。

菅原 続けて。

音子 「作戦成功」って聞くともちろん嬉しいけど、今一つ実感が湧かないっていうか。岩本大尉は褒めてくださるけど、詳しい内容までは聞かされないし。ほら、わたしたちにはモールルス信号が届くだけで戦地の様子は見えないじゃないですか。だから、ときどきわからなくなるんです。自分が戦争をしているのか、演奏をしているのか……怒りました？

菅原 ……林さん、あなた昨今の戦況は聞かされている？

音子 はい。大尉が毎日、掲示板に新聞を。

菅原 そう……。

音子 先生？

空襲警報が鳴り響く。

菅原 音子

やだ、空襲警報。
近頃増えてきたわね。大丈夫よ。落ち着いて防空壕へ。

音子と菅原、避難する。

*

翌日。

電信室。

遠藤と馨が入ってくる。

遠藤

昨日の警報、怖かったね。

馨

ここは表向きは学校だから大丈夫だとは思うけど……ごほっ、ごほっ。

遠藤

馨くん、少し休んだ方がいいんじゃない……。

馨

大丈夫。

遠藤

でも。

ぼく、この体のせいで軍隊に入れなかったから……誰かの役に立てるのが嬉しいんだ。(息を整えて)よし、今日もがんばろう。

音子、入ってくる。

音子

あれ、山下さんは？

馨

そういえば、今日はまだ来てないね。

岩本大尉、やってくる。

岩本

林、至急この電文を送信するように。

岩本、音子に暗号書を手渡す。

音子

あ、はい。

岩本、去る。

音子、電鍵を打つ。

音子

えーと……「本日は晴天なり」と。よし。

女生徒1、部屋に入ってきて山下の席に座る。

音子

あれ？ ねえ、そこ山下さんの席なんだけど。

女生徒1

ああ、彼女ね、転属になったの。

音子たち

え？

女生徒1

代わりに今日からはわたしが。

音子

転属って、どこに？ どうして？

女生徒1

……さあ。

音子

嘘。何か知ってるんでしょ。ねえ、教えて。(岩本が去った方を見て) ほら、今なら大丈夫だから。

女生徒1

……誰にも言わない？

音子
約束する。

女生徒1
……ここだけの話よ。山下さん、満州へ送られたみたいなの。

音子たち
え？

音子
満州？

女生徒1
あなたたちが試験に合格したあと、ほかの人がどうなったか知ってる？

音子たち、顔を見合わせる。

女生徒1
やっぱり何も聞かされてないんだ。あのね、わたしと何人かは残って訓練を続けることになったの。けど、ほとんどの生徒たちは

は次の日から、姿を消した。

馨
どういうこと？

女生徒1
最初は故郷（くに）に帰ったんだと思った。だけど、しばらくして噂が流れてきたの。みんな、日本から遠く離れた場所へ連れて行かれたって。成績の悪い者は戦地や僻地に飛ばされるんだって。

音子
そんな……。

女生徒1
だから山下さんもきつと……音を、間違えたんだと思う。

音子たち、愕然とする。

遠藤、おそろおそろ口を開く。

遠藤
実は、わたしもみんなに黙ってたことがあるの。

馨
なに？

岩本大尉と菅原先生が喋っているのを偶然、聞いちゃったの。沖縄がどうとかって。そしたら……日本は、ほぼ全滅だって。何万人も死んで、民間人の被害も甚大で、本土決戦に備えよって、そう言ってた。

岩本、去る。

音子

……遠藤さん。

遠藤

ひとごころし……この人殺し！

遠藤、音子に掴みかかる。

馨と女生徒1、止めに入る。

女生徒1

遠藤さん、落ち着いて、遠藤さん！

音子

……。

音子、走って出ていく。

馨

音子ちゃん！

馨、後を追う。

*

音子と馨。

馨

音子ちゃん、待って。

音子

……前に見せてもらったの。

馨

え？

音子

遠藤さんの恋人の写真。飛行服を着て、零戦の前に凛々しく立って、笑ってた。

馨

音子ちゃんのせいじゃないよ。

音子

自分が送った音の先で何が起きているのか、頭では理解していてもずっと現実味を感じられなかった。戦地が遙か彼方にあつて、そこにいるのは顔も名前も知らない「兵隊さん」だから。戦争は、わたしとは遠く離れた場所で起きていることだと思いついでいたから。だけど今は……怖くてたまらない。

間。

馨

少しだけ、あと少しだけががんばろう。そうして戦争が、たとえどんな形でも、この戦争が終わったら、音子ちゃんのショパンを聴かせてよ。

馨、微笑む。

馨

ぼく、ちょっと電信室の様子を見てくるね。音子ちゃんはまだ、ごほっ、ごほごほっごほっ……。

音子

馨くん？ ねえ、大丈夫？

馨、体を折り曲げながら咳き込み続ける。

馨

ごほっ、ごほ、ごほっ、ごっ、ごっ……。

馨、倒れ込む。

音子

馨くん！

音子、馨に駆け寄り抱きかかえる。

音子

誰か、誰か来て！ お願い！

菅原、現れる。

菅原

何事ですか！

音子

先生！ 馨くんが！

菅原

水嶋さん！

菅原、馨に駆け寄る。

菅原

わたしが医務室へ運びます。あなたは戻りなさい。

音子

でも！

馨

音子ちゃん……大丈夫だよ……。

菅原、馨を連れて行く。

音子、独白。

音子

電信室に戻ると、遠藤さんの席にはもう別の子が座っていた。使えなくなれば、すぐに補充される。わたしたちの代わりなんて

いくらでもいる。「特待生」「合格者」「特別電信員」聞こえの良い言葉に踊らされていた自分が、今となっては滑稽で仕方なかった。わたしはその晩から高熱を出し、数日間、床に臥せていた。馨くんが咳き込み倒れていく姿が、悪夢の中で何度も何度も反復された。

女生徒1、現れる。

女生徒1

音子ちゃん、具合はどう？

音子

ありがとう。もう平気。

女生徒1

よかった。あの、菅原先生が話があるって。

音子

……わかった。

音子、部屋を出る。

*

菅原の部屋。

菅原が待っているところに音子が入ってくる。

音子

失礼します。

菅原

どうぞ掛けなさい。

音子、椅子に座る。

菅原 熱は下がりましたか？

音子 はい。

菅原 それは何より。

音子 先生、馨くんは大丈夫なんですか？

菅原 暑い日が続きますね。だけど、このところ天気が安定しないので、たとえ今日晴れていたとしても、明日の天気がどうなるかはわかりません。

音子 あの、馨くんは……。

菅原 水嶋馨さんは、特攻隊へ転属となりました。

音子 え？

菅原 隊に欠員が出て自ら志願を。自分が役に立てるのなら、と。実に勇敢です。

音子 何、言ってるんですか？

菅原 あなたの体が良くなるまで、このことは伝えてくれるなど、彼から託されました。

音子 ふざけないでくださいよ。そんなことあるはずないじゃないですか。

菅原 ……。

音子 嘘。嘘でしょ。ほら、いつもみたいに、ずっとわたしたちを騙してきたみたいに、どうせそれもまた嘘なんですよ。本当のこと教えてくださいよ。彼どこにいますか。医務室？ 電信室？ それとも音楽室ですか？ わたし約束したんです。彼にシヨパンを聴かせるって。

菅原 林さん、これは……とても名誉なことなのです。

音子 こんなことするために！ わたしたちはここに来たわけじゃないんですよ！ ……知らないやつ勝手な命令で好きな曲も自由に演奏できないで、楽器も人も戦争の道具みたいに利用して。ピアノは、音楽は、そんなことのためにあるんじゃないんですよ！

問。

菅原 予定通りなら、彼の隊は明日出撃よ。だから林さん、あなたは弾き続けなさい。
音子 無理です……無理です……もう……

菅原、一枚の紙を取り出す。

菅原 明日の楽譜です。出撃予定時刻や目的地の座標、それから、当日は天候の情報を伝えるよう書かれています。
音子 ……。

菅原 (紙を差し出して) よいですか。決して……別の曲を弾いたりするんじゃないよ。
音子 ……え？

菅原 正しい音を送らなければ、出撃は中止になってしまうかもしれないからね。
音子 先生……？

音子、紙を受け取る。

菅原 さあ、もう行きなさい。
音子 ……はいっ。

音子、走って部屋を出ていく。
菅原、小さくため息をつく。

菅原 カレーライスが食べたいわ。

*

翌朝。

空襲警報がけたたましく鳴り響く。

岩本

総員速やかに退避せよ！ 敵にこの場所が見つかった。退避、退避だ！

音子、誰もが走って避難する中を歩いて電信室に入っていく暗号機の前に立つ。

一瞬、世界の音が止まる。

音子以外

フレデリック・シヨパン『革命のエチュード』。

音子、激しく電鍵を打ち鳴らす。

音子の記憶の断片が浮かび上がる。

岩本

「総員玉砕」だ。

山下

わたしみんなより下手っぴだからさ。

遠藤

この人殺し！

菅原

あなたは弾き続けなさい。

馨

音子ちゃん……大丈夫だよ。

音子

爆音と警報が鳴り響く中、先生の表向きの言葉を裏返したわたしは無我夢中で電鍵を叩き続けた。どうか、どうか彼が飛び立ちませんように。

音子、すべての雑音を振り払い最後まで弾き切る。
暗転。

*

玉音放送が流れる。
音子、独白。

音子

その後、白霧音楽学校は焼夷弾の炎に包まれて焼失。そして、昭和二〇年八月一五日。ラジオから流れてきたのはジャズでもブルースでもなく、初めて聞く、たった一人の人間の声だった。ねえ、わたしのシヨパンはあなたの耳に届いたの？
玉音放送にノイズが走る。

音子

え？

『ジムノペディ』が流れ出す。
焼けた山に穏やかな旋律が響き渡る。

*

カーテンコール。(ME:ヨハン・パッヘルベル『カノン』)